

ウズラの飼養衛生管理マニュアル改訂版の発行

～研究成果の手引き書として～

美濃口直和（農業総合試験場畜産研究部養鶏研究室）

【令和4年3月31日掲載】

【要約】

本県は全国一のウズラ卵の生産県である。改訂版は、ウズラの生産基盤安定化を図るため、初版に孵卵衛生管理に関する技術、災害時等の産卵抑制技術や家畜伝染病予防技術等、新たなデータや知見を加えた9つの研究成果を追加した。さらに、改正された飼養衛生管理基準や付随する参考資料等を追加し、内容を充実させた。

1 はじめに（目的）

本県には242万羽（2020年2月）のウズラが飼養され、卵生産量は全国の55%以上を占める全国一の生産県である。当場では、ウズラの生産基盤の安定化を図るため、研究成果を体系的にまとめた「ウズラの飼養衛生管理マニュアル」を2009年に発行した。改訂版（写真1）は、生産現場のニーズに対応するため、特に生産現場から要望が多かったヒナの安定生産にとって不可欠な孵卵衛生管理に関する技術を中心に、新たに9つの研究成果等を盛り込み、内容の充実を図った。



写真1 マニュアル改訂版
（表紙）

2 改訂のポイントとその概要

（1）新たな研究成果の追加（研究成果掲載数：初版11→改訂20へ拡大）

1) 羽色で雌雄鑑別ができる新系統の開発（ブラウン系統及び野生色系統）

2015年に産卵性と外部卵質（粉ふき）に優れたブラウン及び野生色の2系統が完成した。ブラウン系統は、伴性劣性遺伝子のブラウン遺伝子を保有していることから、ブラウン系統のオスと野生色系統のメスとの交配により、生まれてくるヒナの羽色はオスが野生色、メスがブラウンになり、羽色で雌雄鑑別が可能となった（写真1）。

2) 孵卵衛生管理技術

ア. ウズラ種卵の適正な保管条件

種卵を、保管温度は12.5℃、保管期間は16日以内（21日間では50%以下）、置き方は鈍端部を上または下に設置すれば、ふ化率は50%以上確保できることを明らかにした（図1）。さらに、パッキング処理（種卵をポリエチレン袋で被覆）により、保管期間を28日間まで延長することができた（図2）。

イ. 種卵消毒法（逆性石鹼製剤及びグルタルアルデヒド製剤等浸漬法等）

鶏種卵の消毒法として広く用いられている消毒薬（3種類）浸漬法をウズラ種卵に用いても、ふ化率やヒナの活力に悪影響を及ぼさないことを明らかにした（図3）。

3) 育成期及び産卵期における飼料米の適正な混合割合と加工形態（飼料米利用技術）

付加価値のあるウズラ卵の開発及び飼料の低価格を目指すため、飼料用米（玄米）の育成期及び産卵期における市販飼料中への最大混合割合と適正な加工形態について明らかにした。

4) 制限給餌によるウズラの産卵調整技術（災害時の産卵休止技術）

市販成鶏用飼料（CP24%、ME2800kcal/kg）を1羽あたり1日15gの12日間制限給餌により、約1カ月間生存性に悪影響を及ぼすことなく産卵を抑制できた（図4）。

5) 個体別茶玉（異常卵）発生の際時的推移（異常卵発生傾向の解明）

異常卵である茶玉の発生を低減するため、日々の飼養管理において、ストレスへの負荷をできるだけ軽減させることが重要であることを明らかにした。

6) ニューカッスル病(家畜伝染病)ワクチンの効果的な接種法（接種量と接種日齢）

ニューカッスル病オイルワクチンの接種に伴うストレスを軽減して、産卵初期における生産性を高めるため、オイルワクチン接種量及び接種日齢について明らかにした。

7) サルモネラワクチンのウズラへの応用

ウズラ卵へのサルモネラ汚染防止対策の一つとして、鶏用サルモネラオイルワクチンのウズラへの接種による抗体保有状況について明らかにした。

(2) 改正飼養衛生管理基準を掲載

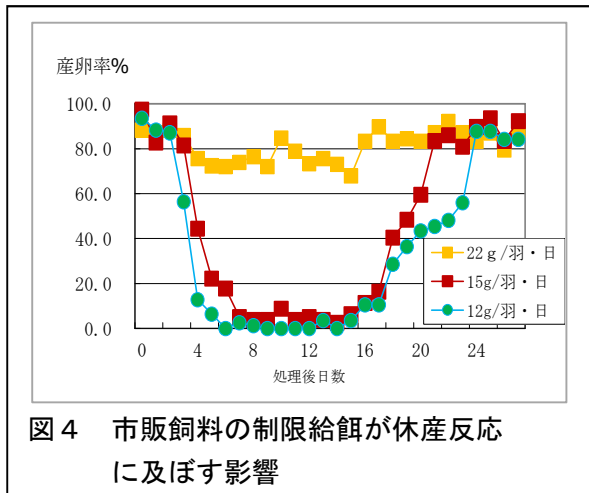
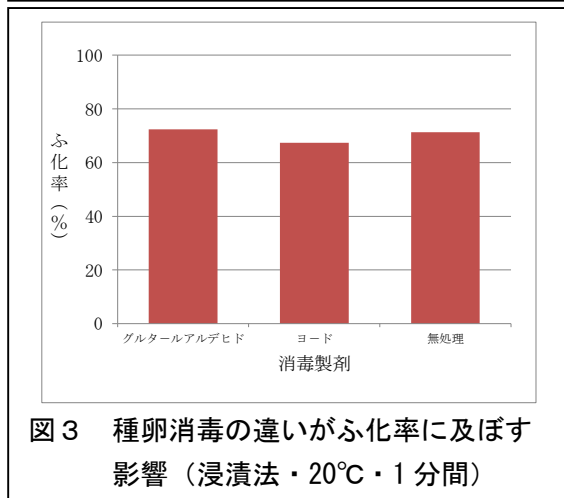
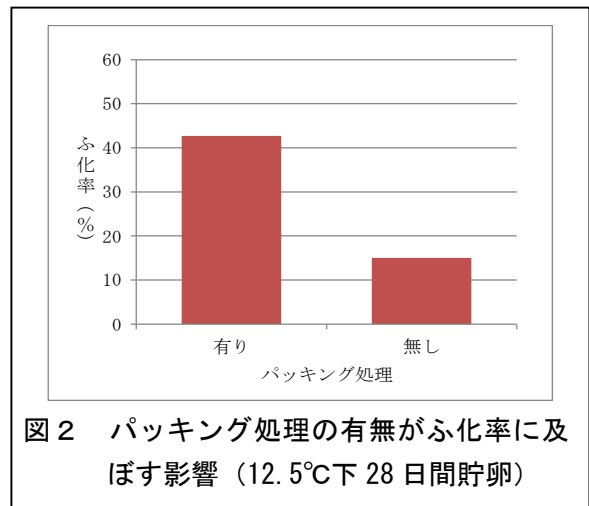
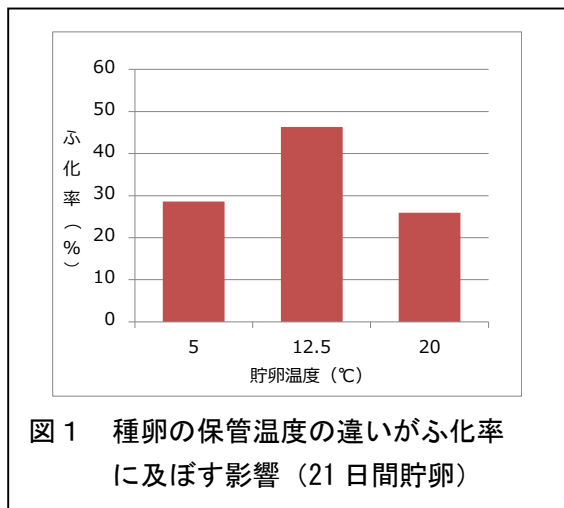
令和2年6月公布、10月に施行された改正飼養衛生管理基準を掲載した。

(3) 最新の研究情報の紹介を新設

オスのクロアカ背部にある暗赤色こぶ状隆起（泡袋）に関する最新情報を紹介した。

(4) 参考資料の充実

系統ウズラの産卵性能、ウズラ肉の栄養成分及び研究報告等を追加した。



3 まとめ（考察）

ふ卵管理、育成期の管理、産卵期の管理及び衛生管理までの一連の飼養衛生管理について、最新の研究成果等を体系的に取り入れ、効率的かつ衛生的な飼養管理を目指した手引き書としてご利用下さい。なお、改訂版は、下記のQRコードからダウンロードできる。

Copyright (C) 2022, Aichi Prefecture. All Rights Reserved.